
まだ冒険を続けられるおつもりですか？

逆意識改革

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ冒険を続けられるおつもりですか？

【Nコード】

N1425M

【作者名】

逆意識改革

【あらすじ】

部屋で寝ていた筈が、気付いたら何故か大自然の中に…。

人里探してヘトヘトになるまで歩いて見たが、

見つかったのはキングスライム唯一匹…マジふざけんなよ！

そこで呼んだ元凶に「自分で何とかしろ」との有難いお言葉を頂いた、やったね。

ドラクエ4の世界で戦士になった青年が頑張るお話です。

注：かなり明るい表現を使っていますが、結構暗めのお話です。

プロローグ1（前書き）

部屋で寝ていた筈が、気付いたら何故か大自然の中に…。
人里探してヘトヘトになるまで歩いて見たが、

見つかったのはキングスライム唯一匹…マジふざけんなよ！
そこで呼んだ元凶に「自分で何とかしろ」との有難いお言葉を頂いた、やったね。

ドラクエ4の世界で戦士になった青年が頑張るお話です。

注：かなり明るい表現を使っていますが、結構暗めのお話です。

プロローグ1

まだ冒険を続けられるおつもりですか？

首が痛い、眩しい、そして…土の匂いがする。

そこまで思考が至った時点で、何か良からぬ事態が起きているのではないかと思ひ勢いよく飛び起きた。

目が光に慣れ、意識がハッキリすると共に自分が美しい自然の中に居る事に気付く。

「どういう事だよ、部屋で寝てたはずだろ…」

突然の出来事に俺はただ呆然と景色眺めることしか出来なかった。

水平線の向こうまで広がる草原、澄んだ空気、涼やかなそよ風、光を反射してキラキラと輝く湖。

その全てが物語っている、ここは俺の住んでいる街ではないと。

…いや、それどころか日本ですらないかもしれないと。

ここは何処か？

分からない。

何故こんな所にいるのか？

分からない。

これからどうすれば良いか？

分からない。

下らない質疑応答を繰り返しながら、あらためて周りの景色を景色をじっくりと観察してみた。

元の場合は蒸し暑い初夏の季節だった筈だが、今はどちらかというと寧ろ肌寒い程だ。

湖の水は透明性が高く、水中を泳ぐ魚までがくつきりと見える。湖を覗き込んだ時に見た水面に映る顔は確かに自分の顔だった。

目にかかるかかからないかといった長さにまで伸びた黒髪にやせ気味な体、

他にも無気力な目にこけ気味の頬といった病的な部分も間違いなく自分のものだ。

視界をさえぎる人工物が何一つなく、小動物一匹すらないこの景色は、

まるでこの世界には自分以外の人間は居ないのではないかと思うほどの静寂感を感じさせる。

いや、事実この世界には自分以外に誰も居ないのかもしれない。

生まれてこのかた体験したことの無い不思議な現象にただただ戸惑うばかりで、

気が付いたら既に日が傾き始めていた。

まだ何一つ現状を把握出来ていないが、このままでは何も解決しない事は分かりきっている。

そう思い立ち上がると服についた砂を払い落とし、延々と続く水平線の向こうへと足を踏み出した。

歩き始めてからもう1時間以上は経っただろうか。

未だに周りの景色は変わらない、美しくも人の気配はまるで感じられない不気味な風景が続く。

普段運動等全くといって良い程行っていない俺には多少キツイ道のりだが、今立ち止まるわけにはいかない。

一度立ち止まってしまえば、今日中にもう一度立ち上がって歩き出す事はないだろう。

流石に自分の根性のなさ位は自覚しているつもりだ。

それに、日が暮れ始めた今となっては、ここで休むともう野宿する

しか無つてしまう。

幸いにも夜だというのにそれほど寒くはない、寝るだけなら問題は無いだろう。

だが、ここは決して今まで自分が住んでいた様な安全な街ではないのだ。

今まで野兎一匹すら見かけなかったが、だからといってここに危険な獣がいない証明にはならない。

「あゝあ、あんな所でジツとしてるんじゃないかった」

少しでも先に進もうと足を早めながらものんびりと景色を眺めていた数時間前の自分に愚痴る。

ただ、その愚痴はどちらかというと当時の自分の行動を省みての後悔というよりは

何処か分からぬ地を身を守る物も持たずに歩く恐怖心を和らげるための独り言なのだろう。

自分でも今の自分が明らかに挙動不審な動きをしている事が分かる。肩を竦め辺りをキョロキョロとしきりに見回すその姿はお化け屋敷に怯える子供のようなだ。

「クッ」

そうやって他人事のように自分を観察する姿に自然と笑みがこぼれる。

そうだ、ウジウジ考えていても事態が解決するわけじゃない。

どうせ身構えた所で何一つ己の身で対処するなど出来ないのだ。

そう考えると幾分気が楽になった気がした。

もう何時間歩いたのかすら分からない。

日はすっかり暮れ、月明かりの元へとへとになりながらも心を奮い起こし歩き続ける。

汗は滝のように流れ続け、足も鉛のように重く、それでも足を引き

摺りながら前に進む。

今は草原を渡りきり山道を歩いているが、頻繁に勾配の変わる坂がさらに体力を奪っていく。

こつという事態に陥って初めて分かった事だが、ひよっとすると俺は結構アウトドア派ではないのだろうか？

居るかどうかも分からない獣に怯えて半日近くも歩き続けるなんて以前の自分なら考えられなかった筈だ。

珍しくポジティブな考えが浮かび自然と気分が高揚する。

「ガサッ」

そんな事を考えていると、ふと後ろから足音の様な音が聞こえた。獣か人か、恐怖半分期待半分に後ろを振り返る。

そこにいたのは巨大な青い球体だった。

その体軀には丸い目が二つと半笑いの口、そして頭には見事な王冠を被っている。

自分の記憶が正しければ、それは正にドラクエに出てくるキングスライムそのものだった。

半透明の体にリアルな目玉が浮かんでおり、画面越しに見たものより幾分グロテスクな見た目をしている。

何故空想世界の生き物がいるのか、残念な事に今現在全身を襲い続ける疲労がこれは夢ではないと教えてくれる。

もしかして、ドラクエのモンスターがここに居るのではなく、俺がドラクエの世界に来てしまったたでもいうのだろうか。

「…一体俺にどうしろというんだ」

そう、この巨大なスライムは「キング」と付くだけあって序盤で出てくるようなモンスターではないのだ。

序盤のパーティーではまず勝てない、ましてや一般人並の身体能力しかない自分が一人ではどうにかできる筈がない。

さらに、この歩き疲れてヘトヘト状態ではおそらく逃げる事すら出来ないだろう。

もつとも、運動部側気味の自分では体力満タンの状態でも逃げ切れとは思えないが。

あまりにも絶望的な現状に頭がこんがかりそうになりながらも必死に解決策を考える。

「ザッ……」

思考は途切れ、一気に意識が現実に戻ってきた。

キングスライムが一步こちらへ歩を進めた。

何でこんな事になったのか、俺が一体何をしたのだろうか。

もはや、体は動かず悲観的な考えだけが浮かんでは消えていく。

戦っても勝ち目が0である以上、向かっていく選択肢は無い。

しかし、猛獣の類は背中を見せて逃げると襲い掛かってくる習性を持つものも多いので

走って逃げようという決心もつかない。

俺はここで死ぬのか……

精神を保つための防衛本能のせいか、想像していたよりあっさりと自分の運命を受け入れられた。

「ああ、こんな所に居たのね」

小さい子供の声が聞こえたような気がする。

「……誰かいるんですか」

まるで机の下に隠れていた飼い猫でも見付けたかのようなのんびりとした声色に若干苛立ちながらも、

この絶望的な状況下での唯一の希望である可能性に縋る様な気持ちで声の相手に呼びかける。

生意気な口を聞いて気分をそこねるといけなさと必死に相手に頼み込んだ。

「いるなら助けてください、お願いします」

心の隅で死の直前に聞く幻聴かもしれないとは思いつつも、

この蜘蛛の糸のように細いチャンスを離してなるものかと声の主に

向けて延々と繰り返し頼み続けた。
すると、その声に応えるかのように急速に周り世界から色が失われ、
その全てが静止した。

プロローグ2

「ごめんねえ、私もちよつと忙しくてね」

目の前に現れた少女はやはりのんびりと、そして面倒臭そうに口にした。

「ああ、自己紹介がまだだったわね。私の名前はルシィ。この世界の救世主となり得る人を探しているの」

ふと、先ほどの「こんな所にいたのね」という台詞を思い出す。

少女は俺を探していると言った。

そして今救世主を探しているとも言った。

まさか、この少女が俺をこんな所に呼び出したのだろうか？

この少女が自分をこんな目に合わせた張本人かと思うと、だんだん怒りが湧いてくる。

しかし、この少女が今の自分の状況を解決できる唯一の人物かもしれない以上、下手な事は言えない。

「救世主？」

その怒りを誤魔化すかのように、とにかく情報を得ようと聞きなれない単語について質問する。

まさか、この俺に救世主の資質でも見いだしたとも言っ気なのだろうか。

だとしても、無理矢理連れてくるのは幾らなんでも非道だろう。

「勘違いしないでね。私は別に他の世界の人達を強制的に拉致して来てるわけじゃないのよ」

ルシィという少女はまるで心を読んでいるかのようにこちらの心の中の疑問に答える。

いや、この超常的な現実から考えると本当に俺の心の中を読んてるのかもしれない。

俺がこの世界に来たのはこの少女のせいではないのだろうか。

心を読まれてるかもしれないという事態に不快感を覚えながらも

小さな少女に責任を擦り付けるような事を考えてしまった事に罪悪感を抱く。

「考えた事無い？英雄になりたいとかゲームの世界で活躍したいとか」

少女はこちらの葛藤など気にも留めずに喋り続ける。

「俺は世界が世界なら勇者として活躍できるんだ、なんてね」

確かに、自分の不甲斐なさは分かっているつもりだった妄想をした事はある。

寧ろ、思い通りにいかない事が人より多い分人一倍そういう妄想はしたかもしれない。

だが、そんな事をいうなら誰だって該当してしまうだろう。

どう考えても少女の事が自分勝手な言い分にしか思えない。

しかし、先ほどまで恐怖に震えて居たにも拘らず、

心の隅には勇者になれるかもしれないという事態に歓喜する自分が居る事も分かる。

「…俺は勇者になれるんですか？」

少女は確かに救世主を探してると言った。

ならば、自分がその救世主である可能性は極めて高いはずだ。

自分へのコンプレックスが強い分自分が勇者になれるかもしれないという期待に胸がはずむ。

「なれないわよ？求めているのは救世主だもの。勇者じゃないわ」

しかし、その期待はスグに裏切られた。

一体勇者と救世主にどれほどの違いがあるというのだと憤りつつも少女の言葉に耳を傾ける。

「勇者の力なんて与えられるのならどこかの国の將軍や有名な冒険者にでもあげるわよ」

だが、それを言うなら何の力もないむこうの世界の現代人を呼び出す必要性がないだろう。

將軍どころかそこ等辺の町人にでも上げた方が幾らかマシな筈だ。

「でも、彼等はどうせ魔王を倒したり世界を平和にしようなんて考

えないわ」

彼女は言葉を続ける。

「貴方だって、そっちの世界で力を得たとしても紛争を止めようなんて考えないでしょ？」

確かに力を得た所で自分の為にしか使わないだろう。

なるほど、ゲームの世界に憧れを持つ人なら魔王を倒そうと考える事もあるかもしれない。

いや…そこまで考えてから思い出した。

少女は勇者の力など与えられないと言った。

ならばいくら現代人がこの世界に来たとしても魔王なんて倒そうとしない筈だ。

それとも現代人には何か特別な力でもあるのだろうか？

「彼等には自分の生活があるもの、無茶をしようなんて考えないわ」
何かが引つかかる…むず痒い焦燥感を抑えながらも少女の言葉に集中する。

「だから、冒険者になって魔物を狩ろうなんて人は殆どいないのよ」
まあ、そうだろうな。

目の前に色を失い佇むキングスライムを見てるとよく納得できる。
こんな化け物を自分から進んで狩ろうなんて馬鹿がそんなに大勢いるはずが無い。

「そう、冒険者になる人間なんて家が貧乏だったり力しか取り得がない人だけ」

全てが分かった。

「貴方ここのお金持つてる？ここの常識知ってる？」

少女はニヤリと笑いながらそう言い放った。

そういう事が、今まで自分の能力のなさにはかり目がいつていたが、それ以前にここで生きる為の常識すら知らないのであれば、店で働

くのも難しいだろう。

ここの文字も知らなければ貨幣価値も知らない。

そんな人間を一から教育してくれる店などこの世界ではそうないだろう。

だとしたら何と悪辣な手段だろうか。

誰にでもあるちよつとした英雄願望を理由に力のない人間を死地に向かわせる。

しかし、冒険者の補填の為だとすれば送られて来たのが俺一人な筈が無い。

情けない話だが、俺一人が増えた所でなんら状況が変わると思えない。

それに、記憶が確かなら少女は「他の世界の人達」と言った筈だ。死んでもいいから出来る限り大量に呼び寄せてみようって事か。

だが、幾ら腹が立つてもここで怒り狂う事が適切ではない位は分かる。

今は聞かなくてはならない事がある、怒りを露にするのはその答え次第でも遅くは無い。

「分かりました引き受けます。ところで、この状態はどうなるんですか？」

「やけにあっさり引き受けてくれるのね。この状態？モンスターに襲われてる事？」

そう、いずれ時は動き出す。

その時に切り抜ける方法はあるのか。

切り抜けられるとすれば、その後の事、つまりレベルや魔法なども聞く必要があるだろう。

大事なのは自分であり、今はそれを何よりも優先するべきだ。決してちっぽけなプライドなんかを優先させるべきではない。

呪いの言葉を吐くのは最後の最後、死ぬと決まった時でいい。

「ええ、それにゲームの世界ならレベルや職業も聞いておきたいですしね」

怒りは完全に抑える事が出来た筈だ。

この答えが何よりも大事なんだと全神経を集中させて聞く。

「さあ、自分で何とかするしかないわ？」

少女はあっさりと言った。

「ていうか、私がモンスター倒せるならそうしてるわよ」

ここまでか…体中の力が抜けていくのが分かる。

そんな事が考えられるなんて思っていたより冷静だなと他人事のよう
に自分を分析する。

さて、最後のいたちっ屁でも噛ましてやるかと口を開こうとしたが、
そこでまだ少女が喋ろうとしてる事に気付いて慌てて口を閉じた。

「ただ、祝福や転職の手続きなら私でも出来るわよ」

一筋の希望が見えた。

怒りを心の奥底に押し込み、一心不乱に少女の言葉を記憶する。

その後の話をまとめると、この世界の人間は「戦士」「武道家」「盗賊」「魔法使い」「僧侶」「承認」「遊び人」

の中から最も自分に適性のある職業が自然に振り分けられ、それを祝福と言うらしい。

レベルという概念も存在していて敵を倒す事で上がるという点ばかり、

ほんの少しではあるが気は楽になった。

レベルの上昇は自分でも分かるがステータスの詳細は自分では分からないらしい。

後、モンスターを倒してもお金は落ちてこないという事が分かった。酒場で発注される依頼を受けて討伐部位を納品する事で報酬が発生するらしく、

当然依頼分より多く倒しても報酬は変わらないそうだ。

現状魔法使いや僧侶なんて選択肢は無い、遊び人など論外だ。

魔法と言う響きには非常に憧れを持っているが、命と引き換えにするほどでもない。

祝福した所で戦っても勝てないのだから、素早さの高い職業を選んで逃げるしかない。

しかし、いくら職業補正があつたとしてもこの疲れきつた体で果たして逃げ切れるのだろうか？

その時、ふと体は動かせないが何故か首から上は動く事に気付いた。きつと話が出来るようにという事だろうが、時間が止まっている今改めて周りをじっくり観察してみた。

左右に雑木林が広がり前にはキングスライム、後ろは延々と続く山道。

駄目か…そう考えた瞬間左側の雑木林の先の地面がない事に気付く。ひよっとして崖だろうか。

浅すぎたり深すぎたりすれば駄目だが、適度な深さであればモンスターを振り切つて生き残れる可能性もあるだろう。

「ねえ、もういいかしら？後4人送らないと今年のノルマが終わらないのよね」

本来であればわずらわしい筈の雑音もそれほど気にならない。

「では、祝福は戦士でお願いします」

勇者を除いて最も防御力が高い戦士に全てをかける事にした。

失敗すれば終わりという事実心臓の鼓動が早くなるのが分かる。

「じゃあ、私はいくわね。もう会う事はないでしょうけど頑張つてね」

そう言つて少女はパチンと指を鳴らした。

その合図と共に俺は崖に向かって駆け出した。

周囲が色を取り戻していくのが分かる。

後ろから何かが猛烈な勢いで這いずつて来る音が聞こえる。

崖は目の前、そこからは水のせせらぎの音が聞こえてくる。

崖は深く下は川になっている。

この奇跡に感謝しながら目の前の崖に飛び込んだ。

その瞬間に背中に衝撃を感じ、意識は暗闇に落ちていった。

一話・旅立ち（前書き）

やっと一話か、気が滅入るW

一話：旅立ち

意識が戻った時、全身を襲う寒気にハッと目を見開いた。

どうやら俺は川辺でうつ伏せに寝転がっているようだ。

服は水に濡れてビショビショで、それが肌に張り付いて気持ちが悪い。

おそらく先ほどの寒気はそれが原因だろう。

何故こうなっているのか、頭の中ではパニックになりつつも、昨晚の事を順番に思い出していった。

どうやら俺は生きてあの窮地を脱出できたらしい。

その事に安堵しつつフラフラと立ち上がって周りを見回した。どうやら、ここは街道沿いの川のようなのだ。

街道にはどこかの商隊であろうか、馬車の列が並ぶ。

そして、その先には城壁に囲まれた大きな街が見えた。

昨日半日かけて探し続けた街の発見に思わず涙がこぼれそうになる。しかし、そこで今の自分の状態を思い出しガクリと膝を落とした。

この世界では見慣れない服に無一文、それだけでも怪しいのに、さらに全身水に濡れてずぶ濡れときている。

こんなザマでは門外で待機している衛兵が通してくれるとは思えない。

自分の職業や出生地すら説明できないのだ。

もしかすると、迂闊に街に近づくのも危険かもしれない。

それにしても、ここから街道が見えるって事はあちらからもこっちが見えるはずだ。

倒れてる人間がいたのだから、助けるかどうかはともかくとして、声をかける位してくれてもいいんじゃないだろうか。

そういった愚痴ばかりが頭によぎる。

実際は分かっている。

この世界では命を取られなかっただけでも運が良いのだろう。

よく考えれば、昨日まで着ていたジャケットはなくなっているし、ジーンズのポケットも全てひっくり返されている。

それに、意識が無いまま川からここまで這ってきたとも思えない。おそらく、財布くらいはを持つてるだろうと考えた盗人が

俺を川沿いまで引き上げ物色したが、ハンカチ一つ持つてない事に気付き、

仕方が無くずぶ濡れの安ジャケットを持つていったのだろう。

ただ、そのおかげで命が助かったと思えば、むしろその盗人に感謝したいくらいだ。

そういった考え事していると、街道からいかにも農家の人間ですといった風体の男性が

馬に小さな荷車を引かせてこちらに歩み寄ってきた。

「おーい、お前そこで何してるんだ？」

壮年の男性はまるで以前からの知り合いが相手かのように軽く話しかけてきた。

この世界に来て…いや、元の世界でも赤の他人にこれだけ気軽に話しかけられた事は一度も無い。

「ある事情で家に帰りたくても帰れなくなったので街に仕事を探しに来たのですが、川に落ちてしまいいて…」

流石に別の世界から召喚されましたと言った所で相手の不信を招くだけだろう。

「出来れば街の中まで連れて行って欲しいのですが、宜しいでしょうか？」

確かに、不審者一人でフラフラ歩いていても門前払いされるだけだろうが、

この世界の人に協力してもらえれば街には入れる可能性は高い。

「ふーん、そりゃあ大変だな。確かに変わった服着てるみたいだし

不審者と間違われてもおかしくはないわな。

だがよ、この街だってそんなに仕事が残ってるわけじゃないんだぜ？何かコネでもあんのか？」

やはりこの格好では不審者と間違われても仕方が無いようだ。

それに、確かに街に入れたからといってどこかの店で働けるなんて都合の良い事は無いだろう。

「いえ、生憎一文無しになってしまいましたので、冒険者としてやっていこうかと考えています」

一文無しという現状では、さっさと酒場とやらで依頼を受けてモンスターを狩るしかない。

それが出来なければ、強制断食の上に野宿しなければならなくなる。せめてこの辺りのモンスターが弱い事だけは願っておこう。

それを聞いた男性は驚いた顔をして口を開く。

「止めとけ止めとけ、お前みたいなひよろした奴に冒険者なんて出来っこねえよ。」

いや、冒険者になるしかねえのか。そうか、そうだな……うん、それがいい」

男性は急に何かをブツブツと呟きだした。

少し不気味に感じたが、どうやら俺の事を考えてくれてるようだ。

「よし、お前今日からウチの村で働け。何、心配しなくてもガキの面倒くらいみてやるよ」

「え？」

男性の中で何か結論が出たようだ。

どうやら、男性の村では若い働き手が減っていて畑が残っているらしい。

そこで、最初は使い物にならないだろうが、

村の将来の為に俺に畑仕事を一から覚えさせて村の働き手にしようという訳だ。

こちらとしてもこれ以上ないほどに有難い話なので喜んで引き受けさせて貰おう。

後は川の流れに身を任せるが如くトントン拍子に話は進んでいった。
「おつ、そうだ。大事な事を聞き忘れてたな。俺はウォル口って言うんだが、

お前の名前はなんて言うんだ？」

「佐藤大樹です。タイキと呼んでください」

「サトウタイキ？変な名前だな」

「いえ、そうじゃなく……」

「紛らわしい……」

「……」

その日から、この世界での俺の生活が始まった。

あれから4年。

今はもうかつての自分の面影は無い。

やせ細っていた体はガツリとした筋肉に覆われ、

生白かった肌も4年間の畑仕事ですっかりと小麦色に変わっている。

暖簾のように目を覆っていた髪は短く刈り込まれ、

もう元の世界に戻っても以前の俺だと気付くものは殆どいないだろう。

村に来た当初は90近い老人にも劣る体力しかなかったが、

今となつては村一番の働き手となっていた。

まあ、この人口100にも満たない小さな村では俺を除けば

現在48歳のウォル口さんが最年少なので、それ程凄い事では無いのだが……。

この4年間、作物を育て、畑を荒らす害獣やモンスターを退治する日々が続いた。

しかし、その日々は決して退屈なものではなく、
便利な道具に溢れていた元の世界よりも充実していたように感じる。
だが、この4年間にずっと悩んでいた事がある。

この村は俺が初めて見た街エンドールから南東に1日行った所にあるリベアという小さな村らしい。

記憶が正しければ、エンドールはドラクエ4に出てくる街だ。

ドラクエ4にリベアなんて村はないが、そもそも世界に村や街が10,20しかない筈が無く、

ただゲーム内で描写されて無いだけに過ぎない。

今は原作より10年近く前らしいが、もう既に魔物の活動が活発になりつつある。

この村で今最も戦闘力があるであろう自分にしても、レベルで言えばただかだか12に過ぎない。

この辺りの魔物ではどれだけ狩ってもその程度が限界なのだ。

この世界でこれからも生きていくつもりならそれではとても安心できない。

だが、自分を鍛えに遠出して間に魔物が村に来たら考えると、気軽に遠出するわけにもいかない。

そうしてウジウジ悩んでる間に4年も経ってしまった。

「おーい、タイキ」

ウォル口さんが呼んでいる。

畑が隣り合っている事もあって、仕事を一通り覚えた後も毎朝一緒に畑へ出かける事が既に習慣となっている。

世間話をしながらしばらく歩いていたが、

どうもウォル口さんの様子がおかしいことに気付く。

いつもならまず「もうここには慣れのか」と聞いてくるはずだが、何故か今日はその言葉が聞こえてこない。

それに、どこかいつもより元気の無いようにも感じる。

「どうしたんですか？元気ないですよ？」

心配になって聞いてみた。

「お前に元気がどうこう言われるなんてな…」
やはりおかしい。

いつもなら俺にそんな気遣いをされたと分かると怒り出すような人なのに。

ウォルロさんは続けざまに言った。

「お前、最近何か悩んでるだろ？俺等の事は気にせずやりたいようにやれ」

「何故…？」

まるで悩みの内容まで分かっているような言葉に激しく動揺してしまった。

俺は原作の話などした事が無いし、原作の話をしなければ悩みの内容も分からないはずだ。

「何、昔冒険者になるつつつてこの村から出てった俺と同じ目をしていたからな。」

この村に来た時にウォルロさんが冒険者をやっていたという話は聞いていた。

友人の居る隣村がモンスターに襲われて壊滅してしまった時に、

もうこんな事が起きないようにと偶然助かったその友人と一緒に冒険者になったそうだ。

その後にエンドールからの派兵で魔物は一掃したらしく拍子抜けしたという話も聞いている。

「お前が居なくなっただからってこの村がどうなるってわけでもねえ。

お前が来るまでもやって来れたんだ。お前の畑は俺が見といてやるから行って来い」

ウォルロさんはそう言いながら俺の背中を押した。

もしかすると、いつの間にか自分一人で何でも出来ると勘違いしていたのかもしれない。

俺が居ないとこの村が…なんて4年前の自分なら考えもしなかっただろう。

その晩荷物を整理して旅の準備を行いながら、

翌朝には村の皆に別れの挨拶をしてこの村を出ようと決めた。

ウォルロさんのようにいずれこの村に戻ってくる事を胸に誓いながら…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1425m/>

まだ冒険を続けられるおつもりですか？

2010年10月14日03時17分発行